

●ポスターセッション (P-毒性・健康影響-01~06)

P-G01「バイオアッセイによる兵庫県下河川水の測定および経年変化」では、兵庫県内の河川水のエストロゲン様活性を酵母ツーハイブリッド法により4カ年にわたってモニタリングした結果が発表され、比較的大きな河川では経年的にエストロゲン様活性が検出され最大で数 $\mu\text{g/L}$  (E2換算)に達したこと、調査した河川の多くの河川では定量下限値付近で推移したことなどが報告された。

P-G02「総排水毒性(WET)に対する生活関連汚染化学物質の影響の予備的検討」では、終末処理場や集合住宅等の污水处理施設で採取した試料水の毒性をミジンコ繁殖阻害試験や藻類生長阻害試験により評価した結果、ならびに毒性への寄与が予想される物質として直鎖アルキルベンゼンスルホン酸やトリクロサンを分析した結果が報告された。

P-G03「LC/MSによるヒトのパラベン類の摂取と排泄に関する研究」では、パラベン無添加の石けん、シャンプーを用いた生活に切り替えた後の尿中のパラベン濃度の変化を追跡した結果、パラベン無添加石けん、シャンプーを使用し始めて1週間後においてもメチル、エチル、プロピルパラベンが検出されたこと、3週間後ではエチルパラベンのみが微量ながら存在する可能性があることが報告された。

P-G04「有機質量分析法を用いた青果類に含まれる農薬のバイオアクセシビリティに関する研究」では、人体が残留農薬を含む野菜を取り込んだ際の挙動を検討するための基礎的な情報として、残留農薬を含む野菜を調理(煮る、焼く)し、それらをアミラーゼ混合水溶液(人工唾液)、ペプシン・塩酸混合水溶液(人工胃液)、トリプシン混合水溶液(人工腸液)にて処理した後の農薬を分析した結果が報告された。

P-G05「ニューラルネットワークモデルを用いた生態毒性データ補完手法開発」では、リスク評価において評価対象物質の生態毒性データが不足している際に、それを補完するための手法が発表された。アルキルフェノールエトキシレート为例とし、Cの鎖長、エトキシ基数、C鎖の分岐程度、曝露時間、試験生物等をニューラルネットワークモデルに入力してEC50、NOECを予測した結果などが報告された。

P-G06「リサイクルタイヤチップの水生生物におよぼす影響」では、タイヤチップを地盤材料として使用したケースを想定し、土壌とタイヤチップとの混合物を用いたユスリカ毒性試験を行った結果、タイヤチップを28.9%、49.1%混合した場合、有意なユスリカ羽化率低下が認められたことが報告された。

(広島大学大学院・工学研究科 中井 智司)